

汽車は走る

小川未明

青空文庫

春風はるかぜが吹くころになると、窓まどのガラスの汚れよごがきわだつて目につくようになりました。冬の間ふゆあいだは、ほこりのかかるのに委まかしていたのです。裁縫室さいほうしつの窓からは、運動場うんどうじょうの大きな桜さくらの木が見えました。

「あの枝えだに花はなが咲くのは、いつのことか。」と、ちらちらと雪ゆきの降る日に、外そとをながめながら思おもつたのが、はや、くつきりと枝全体えだぜんたいにうす紅色べにいろを帯おびて、さんご樹じゆを見るような気がするのです。そして、一つ一つの、つばみがふくらんで、ぷつぷつとして、もうそれが開くひらのも間まのないことでありました。かよ子は、このごろ、裁縫さいほうをしながら、ときどき思おもい出だしたように頭あたまを上げて、外そとをながめるのが楽しみでありました。

「ねえ、みんなで、窓まどのガラスをふきましようよ。」

「こういう出だしたのは、かよ子こでありました。」

「ええ、ふきましよう。この前まえ、おそうじしたのは、いつだったか。ずいぶんしなかったのね。」

「寒さむいんですもの。空そらは暗くらかったし、する気きになれなかったでしょう。」

この四月がつ、卒業そつぎようする高等科こうとうかの生徒せいとたちは、なんとなく気持きもちが浮うき浮うきとして、

明^{あか}るく元氣^{げんき}でした。

「吉田^{よしだ}さんは、東京^{とうきょう}へおいきなきるつて、ほんとうですか。」と、年寄^{としと}つて、もう髪^{かみ}に白毛^{しらが}の見える先生^{せんせい}が、いわれました。

「叔母^{おば}さんが、おてつだいをしながら、もうすこし勉^{べん}勉^{きよう}をつづけたらといいますので。」と、かよ子は答^こえました。

「それはけっこうなことです。このお教室^{きょうしつ}では、あなたのお母^{かあ}さんもおけいこをなさつたのですよ。お母^{かあ}さんは、どの課目^{かもく}もよくおできになったが、お裁縫^{さいほう}もお好^すきでした。いまのお子^こさんたちは、どういふものか、お裁縫^{さいほう}がきらいですが、これからの日本^{にっぽん}の婦人^{ふじん}は、ひととおりのお仕事^{しごと}ができれば、大陸^{たいりく}へもいけないと、校長先生^{こうちょうせんせい}もおつしやつておいでです。」

「それで、私^{わたし}、東京^{とうきょう}へいったら、夜学^{やがく}にでも通^{かよ}つて、洋裁^{ようさい}を習^{なら}おうかと思うのです。」

「いいお考^{かんが}えですね。時勢^{じせい}がこんなですから、衣服^{いふく}のほうも働^{はたら}きいいように改^{かい}良^{りよう}されましうし、私^{わたし}など、こうおばあさんになつては、新^{あたら}しい研^{けん}究^{きゆう}は骨^{ほね}がおれますし、若^{わか}い人^{ひと}にやつてもらわなければ。」と、先生^{せんせい}は、いわれて、さびしそうに笑^{わら}われました。

かよ子は、お母さんが、まだ生徒の時代から、この学校に教えていられる先生の生活いかつかんがえを考えると、なんとなく尊とうとく頭の下さがるような気がしました。

しばらく、かよ子は、うつむいて、だまつてお裁縫さいほうをしていました。

はじめてお母さんにつれられて、この学校へ上がったとき、お母さんは、あの桜の下したに立つて、自分たちが遊戯ゆうぎをするのを見ていられた。ちょうど桜の花が満開まんかいであつた。風かぜの吹ふくたびに、ちらちらと花が散ちつたのを記憶きおくしている。もうすぐに、幾年いくねんめかで、その季節きせつがめぐつてくるのだ。

また、秋あきの運動会うんどうかいの日であつた。それは、自分が六年生ねんせいのときであつたが、徒歩とほきよ競争うそうに出るのをお母さんは、やはり、あの桜の木の下したに立つて見ていられた。桜の幹みきから、校舎こうしゃの窓まどに張り渡わたしてある綱つなには、無数の日の丸ひまるの旗はたや、満洲国まんしゅうこくの旗はたや、中華民国かみんこくの旗はたなどが、つるしてあつた。夏の末なつすえごろから落ちはじめの桜の木の葉はは、もはや幾いくらもついていなくなつたようだ。そして、昼過ぎひるすから、雨がぽつぽつと当あたつてきたのだつたが、お母さんは、いつまでも、自分の番組ばんぐみのすむまでは、帰かえろうともされずに立たつていられた。

「ああ、あの桜の木と、お母さん、そして、このお裁縫室さいほうしつとなつかしい先生せんせい——。」

そんなことを考えると、かよ子は、もうどこへもいきたくなかった。いつまでも自分の村から離れたくないような気がしたのでありました。

「先生、私、保姆さんになりたいと思いますの。」と、一人の娘が、いいました。

「まあ、西村さんがどうしてそんなお考えをなさったの。」

先生は、やせ形の背の高い生徒の方をごろんになりました。

「私、子供が大好きですし、これから、村に人手が足りなくて、みんなが働くのに困りますから、子供の世話をするものが入り用だと思つたのです。」

「それは感心ですね。このあいだの教員会議のときに、この学校にも託児所を設けたらという、先生がたのご意見が出たのですよ。」

「西村さんは、やさしいから、きつといい保姆さんになれると思いますわ。」

かよ子は、心から、同感したように、いいました。

じつさい、自分たちが、学校を出た後、村のためにつくさなければならぬ仕事がい
ろいろあるような気がしました。授業が終わって、校門を出ると、たがいに友だち
と別れて、かよ子は、一人さびしい道を歩いていました。

今年は、雪が少なく、暖かな日がつづいたので、田を隔てた、あちらの丘の梅林には、

ちらほらと白く咲きかけた花が、清らかな感じを与えました。うぐいすが鳴いています。遠くを見ていると、前の方から、二人の小さい子供が、この道を駆けてきました。一人は姉で、後からつづくのは弟でした。

二人ともひじようにうれしそうで、姉のほうが、石けりのまねをすると、弟もそのまねをするし、姉が飛び上がって、なわ飛びのまねをすると、幼い弟も、それと同じかっこうをしたのであります。

そのうちに、チャリンという音がしました。弟のほうが、手に握っていた錢を落としたとみえて、あわてて、あたりをさがしはじめました。それに気づかない姉は、一人で、先の方へ走っていたが、後方で、弟の泣き声がすると、驚いて、振り向き、すぐにもどっていった、自分もいっしょになって、落とした錢をさがしたのであります。けれど、ころがった錢は、どこへいったか、見えぬようなようすでした。

いままでの、二人のうれしそうな姿が、たちまち悲しみの姿に変わってしまった。

「だから、しっかりと握っていればいいのに。」

「しっかりと持っていたんだよ。」

「そんなら落としたくないでしょう。」

ちようど、かよ子は、そこへ通りかかったのです。

「とみ子ちゃん、どうしたの。」

「清ちゃんね、風船球をかうおあし落としてしまったの。」

「まあ。」

かよ子は、いっしょになつて、錢をさがしてやりました。田の縁になつた道の端に、紫色のすみれの花が咲きかけていた。その葉の蔭に、五錢の白銅が鈍い光を放つていたのでした。

二人の子供は、また町の方へ向かつて駈けていきました。

「東京つて、どんなところかしらん。」

かよ子は、歩きながら、まだ見ぬ都会のことを考えていました。これから二、三年勉強にいく、そして、朝晩いっしょに暮らさなければならぬ従兄や、従妹のことを――。だが、四、五日の後には、彼女は、南へ南へと走っている汽車の中に、腰かけていたのでした。

山を一つ越すと、すでに桜の花は満開でした。ある小さな駅にさしかかる前、桜の木のある土手で四、五人の工夫が、並んでつるはしを振り上げて線路を直していました。す

こし離れて、監督らしい役人が、茶色の帽子を被り、ゲートルを巻いて、桜の木の下に立って見守っていたのです。その目から口もとへかけて、柔和な顔つきが、どこかお父さんに似ているように思いました。しかも、洋服のボタンが一つ取れて、ひじのあたりが破れている具合までが、無頓着で、直してあげるといってもめんどろくさがる、お父さんのようすを彷彿させて、気の毒のようにも、慕わしいようにも感じられて、「いまごろ、お父さんは、お家でなにをしていらつしやるだろう。」と、しぜんと目に、熱い涙かにじむのでした。

昼過ぎには、どの山々も、うしろに遠くなつて、故郷をはるばると離れたという心持ちがしました。

ちがった新しい駅に、汽車が着くと、そこは入隊する兵士の見送りで、構内にぎわっていました。白い上衣に国防婦人のたすきをかけた婦人たちがたくさん、かよ子の目に入りました。その中の、いちばんうしろに、立っている背の低い人が、またお母さんそっくりでありました。真つ白な足袋をはいて、手に小さな日の丸の旗を持って、笑いながら、じつとこちらを見ていました。見れば、見るほど、顔かたちからかつこうがお母さんそっくりです。

「お母さん。」と、かよ子は、もうすこしで呼ぼうとしました。

やがて汽車が動くと、そのお母さんも、いっしょうけんめいに旗を振っていました。

「万歳、万歳。」

かよ子の頭は、ぼんやりとしてしまいました。こうお父さんや、お母さんに似た人が、世の中にあるものだろうか、不思議でならなかった。はじめて旅をして知ったのであるが、世間というところは、こんなに近いものどうしの寄り集まりだろうか。そう考えると、急に悲しんでふさがっていた胸のうちが、だんだん明るくなりました。

汽車が、ある国民学校のそばを通過しました。広い運動場では、子供たちが、ボールを投げたり、なわ飛びをしたり、また滑り台に乗ったりして遊んでいました。この運動場にも、桜の木が、二本も三本もあって、下の地は白く、花が散りはじめていました。

「私の学校の桜は、もう咲いたろうか。」

遊んでいる生徒たちの中には、西村さんもいれば、すみ子さんも、とき子さんも、仲のいいお友だちがいるばかりでなく、自分もまた、いるような気がしました。すると、あのお裁縫室が浮かんで、先生のお顔が見えました。

お父さん、お母さん、先生、お友だちも、桜もどうかみんな元気で、お達者でいてください。私は、いつてまいります。修行が終わって帰ったら、そのときは、みなさんのために、力いっぱい働きます……と、彼女は、心に誓ったのでした。

その学校も、運動場も、たちまち後方になって、汽車は、南へ、南へ、と走っていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「生きぬく力」正芽社

1941（昭和16）年11月

初出：「日本の子供」

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「汽車《きしゃ》は走《はし》る」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

汽車は走る

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>